

小さな一步の力

東部小・3 山本 一登

「どりよくはうらぎらない。」

と、お母さんが言っていた。お母さんは、毎朝走っている。寒い日も、暑い日も、雨がふっているときも、雪の日も、強い風の日も、夏休みに入った今も、走っている。何でも、あんなに走れるんだろうとぼくはふしぎに思った。そこで、ぼくもいっしょに走ってみることにした。走る前のぼくは、マラソンがとく意じゃないからやる気があまりおきなかった。でも走ってみたら思ったより体が軽く感じて、さわやかな気分になった。

「あー走るのって気持ちいいな。」

とぼくが言うと、

「さいこうじゃない。」

とお母さんが言った。すると、妹も、

「走りたい。」

と言って、いっしょに走るようになった。6才の妹もぼくたちのペースについてきて、なかなかやるなあと感じた。

ぼくは、お母さんと走っていたことで、今までマラソンはあまりすきじゃなかったけれど、走る気持ちよさを見つけた。でも、お母さんみたいに毎日走るのは、むずかしかった。できなかった。朝、お母さんが走りに行く前に起きられても、ぼくの頭の中では、

「走りに行った方が楽しいし、気持ちいいよ。」

という天使の言葉と、

「このまま、だるーんと、ねてればいいよ。」

というあくまの言葉がたたかっていて、けつきよくあくまがいつも勝ってしまう。そこで、お母さんに、どうやったらできるのか聞いてみた。すると、

「お母さんも、マラソンきらいだったよ。」

と話してくれた。それを聞いて、ぼくはびっくりした。お母さんはスポーツがとく意だからマラソンもとく意だと思っていた。なのにどうして、今はすきなのかを知りたくなった。さらに聞いてみると、お母さんは、去年、病気になって、病気に負けない強い体を作るために、さいしょはむりして走っていたらしい。でも毎日つづけることで、走るのがだんだんすきになったとのことだった。

お母さんは、一か月のさいしょのランは本気で走っている。一月から始めて、毎月タイムがちちんでいったらしい。でも七月のタイムは、あと二秒のところでダメだった。だけどあきらめずに暑い中、走ることをつづけていたら、八月の一キロメートル目のタイムを二十五秒もちぢめることができ、どりよくはうらぎらないと大よろこびしたことがあったらしい。

それを聞いたぼくは、昔の自分を思い出した。ぼくは、四才のときにサッカーを始めた。がんばっていたつもりだったけれど、ドリブルを練習しても、全ぜん上手くならなかった。ドリブルの練習はしなくてもいいか、とあきらめかけていた。でもお母さんの話をきいて、あとちょっと練習すれば、ドリブルが上手くなっていたかもしれない。あと一歩だったかもしれないと、気づくことができた。そこでぼくは、少しずつ練習をしてみることにした。一対一のとき

に、相手をぬけるようにしたいから、コーンをおいてシザースやUターンやルーレットというサッカードの足わぎをやろうと決めた。わざと練習は、小さな一歩だけど、つづけていればお母さんみたいに、ある日とつぜん上手くなる日がくるかもしれない。ぼくは、プロサッカーせん手になりたいというゆめがある。だから、小さな一歩をつづけて、大きな一歩をふみだせるようにしたい。どりよくはうらぎらないという言葉を中心に持ちつづけたい。